



HOKKAIDO UNIVERSITY

Title	国民的独立のパスとロゴス (1) : ドモフスキのパトリオティズム1893-1908年
Author(s)	宮崎, 悠; Miyazaki, Haruka
Description	研究ノート
Citation	北大法学論集, 57(2), 408[77]-369[116]
Issue Date	2006-07-31
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/14540
Type	departmental bulletin paper
File Information	57(2)_408-369.pdf



国民的独立のパトスとロゴス（1）

——ドモフスキのパトリオティズム1893-1908年——

宮 崎 悠

目 次

はしがき

第一章 ドモフスキ研究の現状

- 第一節 研究史
- 第二節 ポーランド国外の研究状況
- 第三節 現代ポーランドの研究動向

第二章 全ポーランド主義の形成

- 第一節 なぜ全ポーランド主義なのか
- 第二節 『我々のパトリオティズム』
- 第三節 革命的プログラムの提言

(以上、本号)

(以下、次号)

第三章 シュラフタ国家からの民族的再生

- 第一節 西欧体験と社会ダーウィニズム
- 第二節 『一現代ポーランド人の思想』
- 第三節 民族の気質

第四章 闘争のロゴス

- 第一節 プログラム転換
- 第二節 ポーランド人とは誰か

第三節 リアリストの04年革命

第五章 未成立国家の外交構想

——『ドイツ、ロシアそしてポーランド問題』を中心に——

第一節 誰を敵とするのか

第二節 新しい帝国

第三節 ホーエンツォレルン国家の拡張

第四節 影響力の政治

第五節 外交によるポーランド再生

むすび

はしがき

本稿は、世紀転換期から戦間期という激動の時代に生きた一人のポーランド人、ロマン・ドモフスキ（Roman Dmowski, 1864-1939）の政治思想を描き出そうと試みたものである。いま何故この人物を取り上げるのか、それについて一言しておきたい。

ロマン・ドモフスキは、19-20世紀にかけての世紀転換期以降、とくに第一次大戦中の欧米諸国において、「ポーランド問題」を国際政治の舞台の前面に提示すべく全力を傾け続けた政治家・外交家として知られている。また、その政治思想は、ポーランドの国民的な統一と独立を目指すパトリオティズムであり、戦間期ポーランドにおける国民形成過程を先き取りするものであった。

第一次大戦終結が目睫に迫るなか、ドモフスキは、ロンドン、パリ、ワシントン、ヴェルサイユを活発に行き来し、後に独立ポーランド初代首相となるイグナツィ・ヤン・パデレフスキ（Ignacy Jan Paderewski, 1860-1941）とともにウィルソン米大統領への働きかけを行うなど、海外においてポーランドを代表する人物として活躍した。その外交活動は、ついにヴェルサイユ講和会議において実を結び、大戦争勃発前は誰もが予想しなかったポーランド国家の復活が現実のものとなる。名実ともに、国際社会において20世紀ポーランドを独立へ導いた一人であった⁽¹⁾。

しかしヴェルサイユ講和会議の直後、健康を害したドモフスキは、焦慮のな

か数ヶ月間もパリでの療養を余儀なくされたため、自らが心血を注ぎ、現実のものとした独立ポーランドにおいて、政治の中心に立つことはなかった。ようやく1920年3月にドモフスキが帰国したときには、すでにユゼフ・ピウスツキ (Józef Piłsudski, 1867-1935) 率いる政治体制が動き出していたのである。1923年にヴィンセントィ・ヴィトス (Wincenty Witos, 1874-1945) 内閣で外務大臣を務めたが、在任わずか6週間で退任している。1926年には、「大ポーランド陣営」を組織し、青年層の教育活動を始めたものの、その反ユダヤ主義的な思想が問題視され、1933年にピウスツキ政権によって解散させられることになる。その後、ドモフスキの健康状態は悪化し、かつての明晰な政治的理論展開を取り戻すことなく、ポズナンで晩年を送った。そして、恐れ続けたドイツによるポーランドの侵攻を見ることなく、1939年1月2日に没する。彼は分割されたポーランドの統一と独立を目標とし希望とし続け、劇的に変化する国際政治状況を鋭敏に察知し、独立への道筋をつけたにもかかわらず、ポーランドが独立をとげた後、その国家像を、自らの手で実現することはなかった。

ここで世紀転換期から第一次大戦までのポーランドの外交・政治活動を概観するならば、そこにおいてドモフスキが示した卓抜した手腕は評価されてしかるべきである一方、彼の政治活動や政治思想に流れる反ユダヤ主義的な要素は、ドモフスキの生涯を語る際に避けることができない陰の側面として、常に存在し続けることになるであろう。それは後述のように、生前から今日に至るまで、ドモフスキに対する評価が定まることなく議論され続け、極端に肯定的な意見か否定的な意見かの両極に分かれている一因である（第一章参照）。

・パトリオティズムのパトスとロゴス

現在も毀誉褒貶が大きく分かれているドモフスキの思想とは、どのようなものだったのであろうか。ドモフスキの政治思想の主要な特徴は、1890-1900年代に形成されたと考えられる。その内容や歴史的背景については次節以降に詳述することとし、ここでは、1890-1900年代にドモフスキが示した、重要な思想上の特徴を挙げ、本稿の構成を示すにとどめる。

第一の特徴は、「全ポーランド主義」と呼ばれる考えにある。これは、三支配帝国によって引かれた分割線と、階級の格差をとともに超越し、ポーランドの統合を目指すという考えを指す。つまり、ロシア領・プロイセン領・オーストリア領に三分割されたポーランドの地理的統合とともに、シュラフタ(ポーラ

ンドの貴族階級)と農民および労働者といった他の諸階級との階級間統合を目標とするものであった。

1890年代、「全ポーランド主義」は、それまでにないパトリオティズムの主張として受け止められた。その第一の理由は、「全ポーランド主義」が、民族的統合を訴える点で、「三面忠誠主義」に反対する論争的概念であったことにある。ここでいう「三面忠誠主義」とは、今すぐ独立することを諦めて、ロシア、ドイツ、オーストリアの三帝国に忠誠を誓い、それぞれの帝国内で経済的・文化的にポーランド人の地位を高めようとする考え方を示す。これは、一月蜂起が壊滅的に鎮圧された後の1870-80年代、抑圧により屏息させられた人々のあいだに敗北主義的な空気が漂うなかで勢いを得た論であった。これに対して、ポスト一月蜂起世代であるドモフスキは、一月蜂起の失敗で痛手を受け政治活動から撤退した人々を「服従派」と呼んだ。そして、この「服従派」が、経済的・文化的活動に専念しようとすることに反発し、三帝国により分割・併呑されている現状には甘んじず政治的な抵抗を行うという主張を表明したのであった。

「全ポーランド主義」が、かつてなく広い層の人々に理解され、勝ち取られるべき概念であった第二の理由は、この主張が、ポーランド国家を構成するポーランド民族の中に、シュラフタだけでなく、農民や労働者も含めるものであったことにある。後述のように、14世紀以降、ポーランド民族を構成するのは、シュラフタと呼ばれる貴族階級の人々に限る、という伝統があった。そのため、従来ポーランド民族の中に農民等他の階級の人々は含まれずにいた。これに対し、ドモフスキの主張する全階級の統合は、ポーランド民族の基盤を大きく変化させるものであった。「全ポーランド主義」は、1893年にもなされたドモフスキ最初の政治論文『我々のパトリオティズム』⁽²⁾にその起源が見られる。そのため「全ポーランド主義」については、『我々のパトリオティズム』の構成内容から、第二章において詳述することとする。

さて、かりに、この「全ポーランド主義」がポーランドの内的環境から生じた民族観を表したものとしよう。それに対し、第二の思想的特徴である社会ダーウィニズムの影響を受けた民族観は、外的環境によって生み出された民族観ということができよう。ドモフスキは『一現代ポーランド人の思想』⁽³⁾において述べて、ポーランドのシュラフタは巨人であったが、しかし、ライバルがいなかったがために繁栄したドードー種の鳥と同類の巨人である、と述べ、ポーランドのシュラフタも、突然の人間の乱入と共に消滅したドードー鳥同様、新

しい状況に適応できず消滅していくものであるとなした。これは、これまでシュラフタのみで構成されていたポーランド民族が、自然界における自然淘汰に引照されるような国際社会の現実のもとで、他の諸民族との競合において生き残ることができずに国を分割されてしまった、という見解であった。ドモフスキは、三帝国に分割支配されているポーランド民族を、消滅の危機に瀕するものと厳しく認識していた。更に、それを社会ダーウィニズム的な観点から解釈することで、ポーランド民族の生存を一層危ぶみ、諸民族との関係において自分たちがすでに「淘汰」されつつあり、滅亡しつつある存在なのではないか、と危惧の念を抱いていたのである。それだけに、ポーランド民族が「弱肉強食」の国際社会において生存を維持するためには、「全ポーランド主義」という思想的基盤を、シュラフタだけでなく全ての階級に形成し、国民的規模において共有することが、生き残るために絶対不可欠な変化として認識されていた。それは、上述のような、農民や労働者を包含するポーランド民族への転換の試みからも明瞭に看取することができる。

また後述のように、ドモフスキは、ドイツ人のポーランド人に対する文化的優位を認めており、ドイツ人はポーランド人を同化しうる手強い民族であるとして畏怖し警戒しつつ、敬意を払っていた。それとは対照的に、ロシア人に対しては民族的・文化的に低い評価をし、その上で、政治活動領域としてのロシア領ポーランドを重視していた。それというのも、ロシア人は、文化的に優位にあるポーランド人を同化しえない、従って、優れたドイツ人の支配下に置かれるよりも、ロシア人の支配下にあった方が、ポーランド民族としての自立を獲得しやすい、と考えたためであった。こうした見解の背景にも、社会ダーウィニズムの思考様式が少なからず影響しているものと考えられる。社会ダーウィニズムに深く影響された彼の民族観とその背景については、第三章において、彼の西洋体験も踏まえ詳しく論じることとする。

これに関連する第三の思想的特徴は、ドイツ警戒論である。ドモフスキのドイツ警戒論においては、「影響力」という要素が重視されており、それはしばしばドイツの経済的・文化的な浸透力をさすものであった。こうした考えは、プロイセンによるポーランド分割の経験のみならず、1900年のブラジル渡航のさい目にした、プロイセンからの入植者の優勢に裏打ちされたものであった。

またドモフスキは述べて、ロシア（そこにはロシア領ポーランドも含まれていた）は常に、経済的により発展している隣国ドイツに市場を提供し、将来的

にはドイツに従属する状況に陥ることになる、とみなした。彼は、いわゆる中心一周辺構造を、ドイツーロシア関係に見出していたのであろう。ドイツ警戒論については、第五章において、『ドイツ、ロシアそしてポーランド問題』（1908年）に基づき分析する。

最後に、第四の特徴は、権力政治の現実を冷徹に認識するリアリズムと、民族への献身を厭わないパッションとが、彼の思想の中に共存している点である。

ドモフスキは、一月蜂起の失敗を踏まえ、非武装的手法を用いての政治活動を主張した。これは、支配帝国の圧倒的軍事力がかんがみれば、武力によって独立を獲得することは非現実的である、という、ポーランド民族についてなんらの過信もない合理的判断であった。

19世紀末のロシア領ポーランドにおいて、独立を目標とする政治活動と、ロマン主義的蜂起主義とは、密接不可分の関係にあった。命の危険を顧みず、ポーランドのため武装蜂起に参加し献身することは、シュラフタの価値観において非常に重要な位置を占めていたのである。これに対し、ドモフスキは、ロシア帝国がもつ圧倒的軍事力のまえに、武装蜂起を独立にいたる手段として有効とは認めなかったばかりか、非現実的であると考え、あえて勝算のない武装蜂起に訴えて命を落とすことがあってはならないと断じた。農民や市民の支持を得る見通しの立たないままに敗北した一月蜂起を教訓とし、無謀な武装蜂起を通じて独立を目指したシュラフタを痛難したのである⁽⁴⁾。

しかしその一方で、ドモフスキは、ポーランドの独立を諦めていたわけではなく、それどころか、「全ポーランド主義」という、一見不可能にみえるポーランド統一・独立構想を主張していた。これは、ドモフスキ特有の、ポーランド民族の生存と独立に対する情念であった。「民族的独立についてのパトスとロゴスとをあわせてもっているものが、ほんとうの愛国者であったのではないか」と岡義武が述べているとおり、ドモフスキの思想もまた、冷徹な合理性と、ときに不可能を可能にする情念とをあわせもつものであった。「独立への意識というものは、現実には一種のパッションの形をとる。しかし、このパッションが真に民族的独立に役立つためには、パッションをもっているというだけでは、もちろん足りない。その主張するプログラムが歴史的意味で合理性を備えていなければならない。そのいみで、いわばロゴスに副っていないならばならなかったのである」⁽⁵⁾。ドモフスキのパトリオティズムに内包されるロゴスの側面、リアリズムは、彼が指導した国民民主派のプログラム変更（1903年）や日露戦

争（1904-5年）への対応、ロシア政府に対するある種の妥協路線といった現実政治における対処の中に、常に存在していた（第四章参照）。

これらの特徴はいずれも、1893年から1908年にかけて、ドモフスキが置かれた政治活動やロシア政治については国際社会の環境が変化する中で、明確化されたものであった。そして、1908年以降のドモフスキの思想的立場の中で、独立闘争の手段として効果の見込めない武装蜂起を否定し、生存競争の場である国際社会においてポーランド民族の独立を獲得するために、ドイツの脅威を訴え、ロシア内部のダイナミズムを視野に入れた政治活動を展開しようとする外交構想は一貫したものであった（第五章参照）。

本稿は、ドモフスキの思想と行動を、とくに1893年から1908年に焦点をあて、本人の著作に基づき、歴史的事件の展開をつうじて、その思想におけるパトスとロゴスの発展を分析する。この時代区分は、1893年にドモフスキが最初の政治論文『我々のパトリオティズム』を発表し、前世代を批判して、『全ポーランド主義』に基づく政治活動の中心となってから、1902年までの西欧体験を経て『一現代ポーランド人の思想』に自己の政治思想・民族観を表現し、ロシア革命勃発の気配が高まる1900年代後半に国際的なリアリズムを深め、ロシア政府との妥協のとも言える交渉に転じ、そのようなドモフスキの転換に対する批判に答える形で、初めてドイツ脅威論を明示し、ロシアと共にドイツに対抗する必要性を説いた『ドイツ、ロシアそしてポーランド問題』（1908年）が上梓されるまでの時期にあたる。つまり、上に挙げたドモフスキの思想上の特徴が明確化された15年間である。したがって、1908年までの活動と、そこで結晶化された思想が、以降ドモフスキの行動指針となり続け、生涯のハイライトといえるべき第一次大戦勃発からヴェルサイユまでの外交活動を規定したといっても過言ではない。

先行研究に関して第一章で述べているとおり、ピウスツキに関する研究に比べ、ドモフスキに関する研究は、そう多くはない。第一次大戦後、独立したポーランド国内で不遇だった彼は、ロシア帝国に協力した裏切り者と見られたり、反ユダヤ主義の唱道者として世上の批判を浴びたりした。しかし、第一次大戦以前の状況を考えるなら、ドモフスキに対する1990年代までの評価において、触れられなかった側面も多い。本稿では、ドモフスキの思想が形成された時期を中心に、ドモフスキ本人の著作に即して、その思想を追い、解釈を試みたい⁽⁶⁾。

いまこのように、三帝国に分割されたポーランドの世紀転換期をあらためて

考察し、そこで、政治家・思想家としてドモフスキがいかに思考し、行動したのかを跡づけるのは、それにより、ドモフスキの政治思想を再検討し理解することが可能となるためである。しかし、それだけではなく、彼の政治思想について考えることは、それを涵養した環境たる第一次大戦前後の国際政治情勢を考えることでもある。それ故に、ドモフスキの生涯をたどることは、世紀転換期から戦間期にかけての国際政治情勢ひいてはその中で重きをなした「ポーランド問題」、そしてポーランド史に、ナショナリズム思想という限られた視角からとはいえ、光をあてることに資するであろう。

第一章 ドモフスキ研究の現状

第一節 研究史

現在のポーランド歴史学界においては、ワルシャワを中心に、ロマン・ドモフスキに関連する研究が行なわれている。歴史家それぞれの立場は、ドモフスキの思想や行動に対して批判的なもの⁽¹⁾、あるいは「ドモフスキの弟子」を自認する信奉者のなもの⁽²⁾、と両極に分かれる傾向がある。ポーランド国内におけるドモフスキ研究は、現代ポーランド政治の状況とも連動しているため、中立的な立場でドモフスキを扱うのが困難でさえある⁽³⁾。ポーランドにおいてドモフスキの思想や行動を研究することは、歴史研究でありながら、政治状況や体制のあり方によって制約を受けざるをえなかった。時として、ポーランド国外でなされた歴史研究のほうが、国内のそれよりも高い水準を示している遠因のひとつであろう⁽⁴⁾。

しかしながら、2000年以降、ポーランド国内においても、史料に依拠することを重視した、歴史研究としてのドモフスキ研究が発表されつつある。そこで本稿においては、さらに最新の研究動向などを加え、研究史を再検討する。

拙訳『我々のパトリオティズム』に付した解題⁽⁵⁾に述べたとおり、ドモフスキの研究史は、同時代の政治家に対する評価から、21世紀の歴史研究まで、約80年にわたっている。ドモフスキ研究において、最も早いものでは1920年代に同時代的な研究がはじまっており、1930年代のヴワディスワフ・ポプターマリノフスキによる研究⁽⁶⁾がなされた時期には、ドモフスキはポーランドの現実政治における論争の対象あるいは政治的闘争の主体となっていたため、同時代的

な批判が加えられる傾向にあった。すなわち、当時ロシア領ポーランドにおける政治活動と不可分だった武装蜂起を、ドモフスキは、独立にいたる手段として有効とは認めなかった。そのため、それを独立の放棄・ロシア政府への追従と誤解され、ポプクーマリノフスキらから批判を浴びたのである。そうした論争にかかわる記述の是非は措くとして、ポプクーマリノフスキは、ドモフスキが執筆していた当時の機関紙や年次報告を史料として用いており、とくに後にワルシャワに移され第二次大戦中に焼失した、ラッベルスヴィルの文書館所蔵の史料も利用していた点で、後世においても一定の史料的価値を保ち続けている。

1939年にドモフスキが没すると、それを機に幾つかの回想録が執筆された⁽⁷⁾。いずれも、国民民主党初期の活動の様子や、他の活動家たちとの交流がドモフスキの思想形成に与えた影響を知らせる史料といえる。

それら当事者的な交友関係に基づく資料としての回想録は出版されたものの、全般的にみて、第二次大戦後の共産主義政権成立以降は、世紀転換期や戦間期のポーランド史が歴史研究のテーマとして避けられる傾向にあった。そのため、先述のように、主となったのは国外における研究であった。1968年から1972年にかけてロンドンで出版されたクワコフスキの研究はその代表的なものであり⁽⁸⁾、いわばドモフスキの伝記の古典となっているだけでなく、ドモフスキの著作や公式の外交文書、本人や関係者の書簡、回想を年代順に編集しており、史料集として引用され続けている。また、同じくロンドンで出版されたロンドンの国立文書館アーカイヴィストであるタデウシュ・ピシチコフスキ (Tadeusz Piszczkowski) の論文は、第一次大戦から第二次大戦までの英国-ポーランド関係を、英国外務省の膨大な史料に基づき分析した大作である⁽⁹⁾。

その間ポーランド国内においては、とりわけ1980年代に民主化の機運が高まると、一時期ドモフスキがポーランド独立時代の象徴として援用される場合がみられた⁽¹⁰⁾。この時期の議論は、学術的な歴史研究というより、現実政治の視点からなされたものであった。そうした中、1988年に上梓されたロマン・ヴァピンスキ (Roman Wapiński) による伝記⁽¹¹⁾は、1980年代にポーランド国内で出された研究の中では、唯一歴史研究として挙げるに値するものであろう。

1990年代に入ると、ポーランド国内において、それまで検閲を避け公表されていなかった研究が出版されるようになった。例えば、1992年に、タデウシュ・ヴォルシャ (Tadeusz Wolsza) が、初期の国民民主党のイデオロギーを主題と

して、1887-1914年の農民問題と国民民主党との関係を描いた論文を公表した。そして、ドモフスキ研究をより広く国民民主党研究の一部と位置づける手法により、ドモフスキを含む国民民主党メンバーについて、詳細な研究を行っている⁽¹²⁾。ヴォルシャは、ドモフスキの思想を、孤立したものとしてではなく、彼に先行する、または同時代の政治活動家らとの交流と対抗によって形成されたものとし、総体的に把握することではじめてドモフスキの思想を分析することが可能だとする。こうしたヴォルシャの姿勢は、ポーランド国内における国民民主党研究において、むしろオーソドックスなものといえる⁽¹³⁾。

第二節 ポーランド国外の研究状況

ポーランド以外でなされた研究として、すでに古典的位置を確立しているのは、ノーマン・デイヴィス (Norman Davies) による1970-80年代の業績である。デイヴィスは、1972年、ドモフスキが英国外務省に対して行った外交活動を、イギリス側の一次史料に基づいて分析し、ロンドンに在住するポーランド人グループとの競合関係を描いた。この小論文において、デイヴィスは、狡猾な壮年外交家ドモフスキと、若いユダヤ系ポーランド人の政治活動家アウグスト・ザレスキ (August Zaleski) とを対置し、1914-1919年のロンドンを舞台に、第一次大戦終結後のポーランド国家形成を睨んだ外交工作の機微を描き出している⁽¹⁾。また、デイヴィスは、代表作のひとつである *Heart of Europe* (1984年) において、国民観や政治活動における独立の位置づけ、政治活動の手法といった両者の相違点を軸に、第二次大戦以前のポーランドにおける政治状況を簡潔かつ効果的に描いた⁽²⁾。

1980年代には、ドモフスキを単独で扱った伝記的研究や、ドモフスキの欧米外交活動に焦点を絞った研究が、アメリカの若手研究者により着手された。1980年に、アルヴィン・マルクス・ファウンテン (Alvin Marcus Fountain) が、ドモフスキの半生の伝記 (1906年迄) を執筆し⁽³⁾、また1981年には、インディアナ大学のピーター・アルフレッド・ヴィトコフスキ (Peter Alfred Witkowski) が、戦間期の独立ポーランドにおけるドモフスキの対アメリカ外交活動を中心にした博士論文を発表している⁽⁴⁾。続いて、1985年には、やはりインディアナ大学のポール・ラタフスキ (Paul Latawski) が、ドモフスキの対イギリス外交と第一次大戦後のポーランド再生の過程を論じる博士論文を発表した⁽⁵⁾。

1990年代になると、ポーランド国内の資料館が公開されたことに伴い、詳細な一次史料に基づく記述を特徴とする研究が見られるようになった。中でも特筆すべきは、ロバート・E・ブローバウム (Robert E. Blobaum) ⁽⁶⁾ およびブライアン・ポーター (Brian Porter) ⁽⁷⁾ の研究であろう。

ブローバウムの研究は、1907年革命前後のロシア領ポーランドにおける政治活動形成を、労働運動やカトリック教会や修道会の社会活動といった、民衆に近いレベルから、一次史料に依拠して構成していった論文である。従来、政治指導者や政党を中心に描かれてきた政治史とは一線を画し、登場する政治活動家のだれに対しても思い入れのない、さめた視点から、主人公なき歴史を執筆している点に特徴がある。この時期の国民民主党におけるドモフスキの活動が、社会主義者グループだけでなく、労働者自身が組織した活動など、他の社会集団・組織との関係において相対化されて描かれている点で、政治活動家を中心に論じられてきた歴史とは異質な歴史論文といえる。

また、ポーターは、19世紀ロシア領ポーランドにおける、政治思想の諸潮流を詳細に論じている。ポーランド政治思想を、様々なヨーロッパ政治思想史の中に置き、当時ヨーロッパで流行していた社会ダーウィニズムやポジティブイズムが与えた影響をふまえてドモフスキ思想を分析しており、そのナショナリズムの起源について深い洞察を示している点に特徴がある。

また、日本における研究としては、宮島直機が、国民民主党系の農民向け新聞を網羅し、ドモフスキらが農民に向けて展開したナショナリズム運動を詳細に分析しており、世紀転換期ポーランド政治史の古典的存在といえる⁽⁸⁾。

第三節 現代ポーランドの研究動向

1990年代以降、ポーランド国内においては、従来の見解を修正する研究動向が始まったことについては、第一節で述べたとおりである。すなわち、1980年代までのドモフスキ研究においては、戦間期ポーランドがロシアから独立する際に果たした役割の大きさゆえに、ドモフスキをタブーとし、無視し、あるいは親ロシア的に解釈する、という偏りがみられた。また、1990年代には、それまで検閲を避け未発表のままになっていた研究が遅ればせながら上梓されるという、特殊な状況が生じた。

2000年代に入ると、こうした揺れを修正する研究が発表され始める。先に述

べたように、体制転換に伴いポーランド国内の文書館が公開された結果、より歴史的な視点に立つ研究が可能になったことも、その要因である。例えば、ヴワディスワフ・ブーハク (Władysław Bułhak) は、19世紀ロシア領ポーランドにおける農民問題の解釈をめぐる、ロシア政府と民族連盟 Liga Narodowa の利害対立に着目する。そして、ロシア領ポーランドにおける国民形成のイデオロギーのひとつとして、ドモフスキの「国民への政治」を位置づけ解釈している。後述のように、当時、ロシア領ポーランドの農民は、農奴解放によって農民の支持を得たいロシア政府にとっても、農民を啓蒙することでポーランド国民としての意識を持たせ政治活動の基礎としたい民族連盟にとっても、存続の鍵となる重要な存在であった⁽¹⁾。

その後も、ドモフスキの思想に関する数冊の研究が、ポーランドの若手研究者らによって出されている。例えば、マチェイ・ワゴダ (Maciej Łagoda) は、2002年に博士論文を上梓し、ドモフスキの「全ポーランド主義」を主題に、ドモフスキ思想の分析を試みている。また、グジェゴシュ・クシィヴィエツ (Grzegorz Krzywiec) は、ドモフスキを中心に、19世紀ロシア領ポーランドのインテリゲンチヤの政治思想に関する博士論文を提出している⁽²⁾。

第二章 全ポーランド主義の形成

『我々のパトリオティズム』は、ロマン・ドモフスキ最初の政治論文であり、その書き出しは、「1893年4月、ワルシャワ」⁽¹⁾で始められている。三部構成の小論文で、ポーランド国民の統合と、ポーランド国家の再生とを求める内容になっている。

この小論は、ドモフスキがワルシャワ監獄から約5か月に及んだ収監の後、1月3日に釈放された直後に書かれたものと推定される。このときドモフスキは29歳、ワルシャワ大学で生物学を専攻し、博士号を取得していた。それと平行し、1888年からポーランド青年同盟 Zet の指導者として活動し、政治活動に関与していた。そして、1891年に五月三日憲法⁽²⁾の百周年を記念するデモに参加し、当局に追われてパリに逃れ、翌年帰還を試みてロシア領ポーランドーガリツィア国境で逮捕された。この収監の際に、ツァーリの名において大学からの追放を宣告されたドモフスキは、生物学を断念し政治活動に専念することとなった。

『我々のパトリオティズム』は、他のドモフスキの著作同様に、生存中はもちろん、ドモフスキ死後にも版が重ねられている。本稿では、1893年版を引用した⁽³⁾。これまで、とくに第二次大戦後の共産主義政権下では、戦間期の独立ポーランドに関する研究が避けられていた。そのため、戦間期に活躍したピウスツキやドモフスキといった政治家についても、研究が避けられる傾向にあった。反面、没後50年を過ぎてでもなお、彼の著作は国内外で出版され続けている。また1990年代以降も、国内での著作再版がみられ、ドモフスキの思想が、愛国主義として解釈され、読まれる時代の象徴として一定の人々に受け入れられ、読み手たちの求める文脈から繰り返し援用されてきたことがうかがえる。

第一節 なぜ全ポーランド主義なのか

・三分割領それぞれの状況

『我々のパトリオティズム』が執筆された19世紀末、ドモフスキが活動を開始したポーランド会議王国周辺の状況とはどのようなものだったのであろうか。1772年、1793年、1795年の三次に及ぶ分割を経て、主権国家としてのポーランドはヨーロッパの地図から姿を消し、ロシア、オーストリア、プロイセンの領土の一部となっていた。

18世紀以降、プロイセン領ポーランドの歴史は、領土を広げては失い、また回復し、飛び地を埋めていくという、陣取り合戦の歴史であった。フリードリヒ二世はオーストリア継承戦争(1740-48年)を起し、マリア・テレジアのオーストリアからシレージェン地方を奪う。その後、七年戦争(1756-63年)を通じてオーストリアに次ぐ大国となったプロイセンは、1772年、第一次ポーランド分割を実行し、王領プロイセン(ヴェストプロイセン)を併合した。以降、フリードリヒ二世は積極的に植民政策を行い、この地域の「プロイセン化」を図る。続けて、1793年に第二次分割、1795年に第三次分割を行い、大ポーランド(ポーゼン)と新オストプロイセンを併合した。ナポレオン戦争の結果、1807年以降、一時的にエルベ以西の領土を失ったものの、1815年にワテルローの戦いでナポレオンに勝利し、領土を回復する。ウィーン会議において、プロイセンはティルジット条約によって喪失したヴェストプロイセン南部に加えて、ワルシャワ公国西部のポズナンを獲得した。プロイセンの一州となったポーゼン大公国は、1830年にワルシャワで起こった一月蜂起をきっかけに総督

府を廃止され、1867年に北ドイツ連邦へ、1871年にドイツ帝国へ編入される⁽⁴⁾。

こうして、プロイセンの体制と領域がめまぐるしく変化する中、分割された地方に居住するポーランド人は、落ち着いた生活などできない状況にあった。ポーランド人の政治活動の場も、こうした変化に応じて移動していく。1848年以前は、ポーゼンの地方議会や地方機関が、自然な集会の場となっていた。しかし、その後政治活動の中心は、自由主義的な空気の残るベルリンのプロイセン議会 (1872年以降は帝国議会) 内のポーランド人議員でつくる「ポーランド・サークル」へ移った⁽⁵⁾。

とはいえ、プロイセン領ポーランドのポーランド人には、一定の政治活動を行う自由が認められ続けていた。後述のように、政治活動はおろか学術的活動のための結社の自由も厳しく制限されていたロシア領ポーランドとの差は大きかったのである。

会議王国の南へ目を転じると、そこにはガリツィアが広がっている。ガリツィアは、18世紀末から第一次世界大戦までオーストリア領とされ、エスニック上のポーランド人が多く居住する西ガリツィアと、ウクライナ人が多く居住する東ガリツィアとに分かれていた⁽⁶⁾。

東ガリツィアでは、都市住民でみればポーランド人が多数派を占め、役人や地主として、政治的・経済的に優位にあった。その一方、東ガリツィアを見ると、貧しい農民として多くのウクライナ人が居住していた⁽⁷⁾。

次に視点をロシア領ポーランドに転じると、おおきく会議王国と、それより東部の領域⁽⁸⁾とに二分することができる。前者については、ワルシャワを中心とする、ロシア領ポーランドの核となる地域ということができる。

他方、後者ロシア領ポーランド東部地域は、東ガリツィアと近い状況にあった。そこは、農村地帯であり、産業はなく、土地や財産を持つポーランド人つまりシュラフタが農地の大部分を所有していた。ポーランド人の人口が最多数だったわけではないが、文化的・経済的に、ポーランド人は優越した立場にあった。

19世紀、一月蜂起世代のロマン主義的な政治活動者たちが目標とした独立回復とは、「歴史的ポーランド」と呼ばれる広大な領域の回復であった。つまり、同君連合を形成していたリトアニアはもちろん、現在のベラルーシやウクライナの西部領土も含む、大きな領土をもつポーランドの独立を回復することが、理想とされていたのである⁽⁹⁾。

また、1890年代初頭、ロシア領ポーランドとりわけ東部領域に、ペテルブルクやモスクワから、強制退去・追放されたユダヤ人が移住してきたことに注意しておく必要がある⁽¹⁰⁾。

そして、旧ポーランド東部領域を名実共にロシアに支配されつつも、なおロシア領ポーランドの大半を占めていたのが、ワルシャワを首都とする会議王国であった。会議王国は、1815年ウィーン会議において、ロシア皇帝を国王として設置された。こうしてみると、会議王国は、西をプロイセン領ポーランドに、南を東西ガリツィアに接し、東の旧ポーランド東部領域をロシア領とされ、そこへロシア本土を追われたユダヤ人が送り込まれ、北の海への出口をプロイセンにふさがれて、三帝国による支配に取り囲まれ、多方面から多民族の入植が進みつつある状況であった。そして、会議王国自体も、ロシア政府が派遣した総督による支配を受けていた。ドモフスキの文面に繰り返し滲み出る閉塞感、地理的に三帝国に囲まれているということだけでなく、西方からのドイツ人の入植や、東方からのユダヤ人の移住に直面してのものであろう。更に、会議王国においては、ロシア人が役人や教師、鉄道員となってポーランド人の職を奪い、日常生活のレベルにいたるまでロシア帝国の支配・抑圧を受けているという状況があった。

第二節 『我々のパトリオティズム』

ここまで、『我々のパトリオティズム』が執筆された19世紀末ポーランドにおける地理的・行政的状况を概観し、ポーランド政治思想の主たる潮流を整理した。以下では、それらをふまえ、『我々のパトリオティズム』本文に即して解説したい。そして、ドモフスキが見たロシア領ポーランドの現状と、それに基づいて構想されたプログラム(政治綱領)としての『我々のパトリオティズム』を検討する。

・地理的分断の克服

ロマン・ドモフスキ最初の政治的著作『我々のパトリオティズム』の書き出しは、「1893年4月、ワルシャワ」⁽¹⁾で始められている。三部構成の小論文で、ポーランド民族の統合と、ポーランド国家の復活とを求める内容になっている。

先に挙げた、1890-1900年代にドモフスキが示した重要な思想上の特徴のう

ち、『我々のパトリオティズム』に顕著に読み取ることができるものとして、「全ポーランド主義」と呼ばれる考えがあった。「全ポーランド主義」は、三支配帝国によって引かれた国境線と、階級の格差とを超越し、ポーランド国民の統合を目指すという考えである。

しかしながら、構成を見る限り、『我々のパトリオティズム』はロシア領ポーランドにおける統治・抑圧への批判で第一部の大半を占められている。続く第二部では、そうしたロシア政府の支配に対し、ポーランド人がどのような政治的活動を行っているのかを、諸政治グループの潮流を整理することによって示している。最後に第三部で、「我々のプログラム」が概説される。この部分もやはり、ロシア政府に対抗し、攻撃的かつ革命的な手法によって、国民の土台を獲得しようというプログラム(政治綱領)である。

このような構成からすると、「我々の」愛国主義を訴え、ロシア領ポーランドだけでなく、プロイセン領ポーランドやガリツィアに住むポーランド人の統合を訴えているにもかかわらず、一見ドモフスキの議論はロシア領ポーランドだけを射程におさめた議論展開であるかのようである。これは、ドモフスキが冒頭で提示した主題とは矛盾するかに見える。しかし、それを彼は次のように否定する。

あらゆる政治組織・グループ・政党が、その活動分野にかかわらず、〔三分割領全てを統合するという〕原則に従う義務を負うのである。したがって、本稿において、仮にロシア分割領の問題だけを考え、ロシア政府との関係だけに注意を向けることがあったとしても、それは原則を忘れたからではない。〔ロシア分割領に注意を向けるのは、〕

- 1) ロシア分割領を重要な活動場所としている人々を代弁するためであり、
- 2) ロシア支配下に、ポーランドの最大かつ最重要の分割領〔ポーランド会議王国〕が置かれ、ポーランドの生命の火であり国の魂の首府であるワルシャワが含まれ、それゆえに、〔ロシア分割領こそが〕祖国全体の運命を決定する分割領となっているためである。⁽²⁾

三支配帝国によって引かれた国境線を超越したポーランドの統合が、ドモフスキの理想であった。その一方で、ポーランドの中心をワルシャワと位置付け、

まずロシア領ポーランドの危機的状況を訴えようとしている。国民の魂の中心であるはずの最重要の地が、最も危機に瀕し弱い立場におとされている、という、あるべき姿と現実との落差があった。

さて、三分割領全ての統合と、ロシア領ポーランドを中心に置く前提とが、一見矛盾するように見える点については、研究者の間でも複数の見解がある。ワゴダは、ドモフスキら後の『全ポーランド評論』紙の政治活動家・編集者がロシア領ポーランドに思考を集中した理由を、会議王国の状況を他の分割領の新聞通信員に伝えようとする意図であった、と分析している⁽³⁾。これに対し、ブーハクは、「より重要な根本的理由が存在しているのは確かである」とし、このテーマに関するドモフスキの見解を引用して、ワゴダに反論している⁽⁴⁾。

ブーハクは、ドモフスキやポプワフスキがロシア領ポーランドを最重視した理由は、この地域がポーランドの中心地を含んでいること、更に、政治活動の基盤となる可能性を最も多く含んでいることにあった、と分析している。ブーハクは、上記の引用部分にあるように、ドモフスキがロシア領ポーランドを「祖国全体の運命を決定する分割領」⁽⁵⁾と位置付けていることに着目している。続けて、ドモフスキ初期に協働者として重要な役割を果たしたポプワフスキの「ここ〔ロシア領ポーランド〕には最もなすべき課題があり、ここが最も危険な場所である。しかし、ここに最も堅固な力がある」という主張や、同じくドモフスキと活動を共にしていたコジツキの「会議王国の陣営は…ポーランドで最も重要な政治的陣営である」という主張を引用し、論拠に加えている⁽⁶⁾。

筆者の見解では、ドモフスキがここでこめた主張は、第一に、ワゴダが主張するように、ロシア領ポーランドがガリツィアやプロイセン領ポーランドに対して発した連帯の喚起であったと解釈できる。更に、ロシア領ポーランドにこそ、将来のポーランド国民が存在しているというアピールでもあった。例えば議会代表について、各分割領の代表であってはならない、と主張されている。この当時、ツァーリ専制のロシア領には議会が存在していなかった。自分たちの利害を代表する者の無い状況で、政治活動が比較的自由な他の分割領のポーランド人に対して、ドモフスキは協力を訴えている。

そして第二に、将来のポーランド国家を地図に描く際、分割以前に首都であったワルシャワを含むロシア領ポーランドがその中心に置かれたのであろう。更に、ナポレオン戦争以降の地図を見れば明らかなように、ロシア領ポーランドは、三分割領中、最も広い面積をもつ分割領であった。また、エスノー言語的

意味でのポーランド人が多数居住する地域でもあった⁽⁷⁾。

これに関連して、第三の理由は、ブーハクの指摘のとおり、ロシア領ポーランドが政治活動を展開する上で重要な、拠点となる地域であったという点にある。つまり、政治活動を行ううえで基盤となる組織の中心を、ロシア領ポーランドに置くべきであるという考えが重視されたのであろう。そこには、一月蜂起以降、海外の亡命拠点を中心に政治活動が行われてきた状況への批判も込められていた。

実際、ドモフスキは、ロシア領ポーランドにおいて政治活動を開始している。1888年にポーランド青年同盟 Zet に加入し、1889年には指導的な役割を果たすようになった。そして、ドモフスキの提唱により、1889年ポーランド青年同盟のワルシャワ支部は、チューリヒにあるポーランド連盟 Liga Polska の本体から独立する⁽⁸⁾。

そして1893年、ポプワフスキとドモフスキは、ポーランド連盟を改変させて、民族連盟 Liga Narodowa を結成するという「クーデター」⁽⁹⁾を起こすことになる。これが、1905年までドモフスキの活動拠点となる民族連盟の創設であった。この「クーデター」における変化は、一月蜂起世代からドモフスキ世代への交代であると同時に、亡命先の遠隔地からポーランド政治を構想する一月蜂起世代の姿勢を否定し、ロシア領ポーランドにおいてポーランド政治を実際に行うという、机上の空論や過去の栄光への感傷を脱した政治活動への移行でもあった。

・19世紀「ポーランド人」の多様性

領土の分断という地域的断絶の問題のほかに、ドモフスキが超えようとしていたもう一つの障壁は、階級間に生じる格差にあった。諸階級は、三分割領にそれぞれ存在するが、ポーランド民族全体のための政治を行うには、どれか一つの階級利害を優先して考えることはできない。こうした考えからは、ドモフスキが社会主義思想に少なからず影響を受け、或いは社会主義思想を強く意識していたことが伺える。ドモフスキと社会主義の関係については、『我々のパトリオティズム』第二部においてポーランド人の政治活動の諸潮流を概観する際、詳しく論じられることになる。

まず第一部の冒頭では、「国民への政治」のあるべき姿が述べられている。

国民への政治は、その大原則として、ポズナンやガリツィアやワルシャワといった、個々の分割地域のものであってはならず、ポーランド全体のものでなくてはならない。それぞれの地域の政治的状况に応じて、我々は各分割政府との様々な関係を認識しなければならないし、地域の事情に適した様々な活動手段を調整しなくてはならないが、しかし原則それ自体が、地域の事情によって変わることはない。つまり、ポーランド人それぞれの政治的行為は、どこで遂行され誰に対して差し向けられたものであるかに関わらず、国民全体の利害を視野に入れていなくてはならない。⁽¹⁰⁾

ロシア、オーストリア、プロイセンによって三分割されて以降、三帝国はそれぞれ、異なる制度で支配を行っていた。ポーランド人の定義そのものさえ、行政によって異なっていたのである。ノーマン・デイヴィスが、「ポーランド人」という言葉について「分割諸帝国の各々の官僚機構は、各々の定義に従っていた。ロシア領においては、公式に、ブーク川左岸に居住する者が、ポーランド会議王国の国民たる「ポーランド人」とされた。ブーク川右岸に居住する者は、たとえ左岸に居住する「ポーランド人」の兄弟であったとしても、「ロシア人」と定義された。会議王国が廃止された1874年以降になると、ブーク川の両岸の人々が、本人の意思に関係なく「ロシア人」に区分された。ポーランド人とされた人々自体、多種多様であった。」⁽¹¹⁾と述べたのは、的を射ている。「ポーランド人」と一口に言っても、経済状況や公用言語、政治的自由の度合い、自己認識など、多くの点で、置かれている状況に違いがあった。

また19世紀後半に特殊の事情として、一月蜂起の失敗があった。一月蜂起の敗北と、その後の鎮圧を経て、ポーランド人の中には無力感が広まっていた。その結果、分離独立を求める蜂起は流血を招くだけで勝つ見込みがない、という、伝統的ロマン主義や蜂起主義に対する批判的な見方が主となっていた。加えて、社会状況が安定してくると、経済活動や政治的自由が相対的に活発だったガリツィアをはじめ、プロイセン領ポーランドやロシア領ポーランドでも、その状況を受け入れ、その中で生活を築いていこう、という現状肯定の考えが出始めていた。そのひとつが、いわゆる「三面忠誠主義」で、これは、ガリツィアのポーランド人はオーストリア帝国に、プロイセン領ではドイツ帝国に、ロシア領ではロシア帝国に、それぞれ忠誠を誓い、三分割状態のなかで民族的地

位を高めよう、という考えであった。

先に引用した冒頭部分は、ポーランドが三分割されている現状を容認する考えへの批判であり、ドモフスキはポーランド人の統合を何より訴えている。この部分がドモフスキのポーランド観の基礎といえる。ただし、ここで用いられている「ポーランド全体 ogólnopolska」という考えは、後に「全ポーランド wszechpolski」⁽¹²⁾へと発展する。『我々のパトリオティズム』が書かれた1893年には、未だその途上の思想であった。

・全ポーランドの代表

ロシア政府の脱ポーランド化政策は、第一部で詳述されているように、ポーランド人の生活全般にわたっていた。ドモフスキの観察によると、まず言語政策では、ポーランド語が禁止され、公用語としてロシア語が使用されていたのはもちろん、ポーランド語教育も抑圧されていた。そして、カトリックとの戦いにおいて、ロシア政府は正教会への強制的改宗を正当化した。また政治的自由の抑圧も行われ、商業あるいは学術目的であっても結社が認められず、政治的自由の伸張が封じられると同時に、経済活動の自由も巻き添えとなり、発展できずにいた。

そうしたロシア領ポーランドの状況をふまえると、以下の引用部分は、単に国会議員がもつ地区代表的性格の批判を意味するわけではないことがわかる。

この原則に従えば、いずれかの〔分割領において〕選挙区から議会に選出された議員は、何よりも民族全体の利害を代表する義務を負うのであって、自分の選挙区の利害代表ではない。ドイツやオーストリアの立法者集団のなかに混じって、ポーランド人の議員は、全ポーランドの代表として送られているようには見えないかもしれない。また、彼らが、常に全ポーランド民族の利害に関心を持っているというようにも見えないかもしれない。しかし、だからといって〔国民への政治は、個々の分割地域のものであってはならず、ポーランド全体のものでなくてはならない、という〕我々の原則が誤っていると証明されたことにはならない。パトリオティストの名に値するかどうかと言うなら、むしろ彼らが、ポーランドでなく、ガリツィア或はポズナンのみの利害を考えるパトリオティスト〔愛郷主義者〕になってしまっ

ているのである。⁽¹³⁾

後にロシア議会（ドゥーマ）に議席を得たドモフスキが、議員としての活動を、未だ存在しないポーランド国家の代表として行ったことは後述の通りである。しかし、この当時、ロシア帝国にはまだ議会（ドゥーマ）が存在していなかった。そのため、前節でも触れたとおり、ドモフスキは他の分割領のポーランド人議員に対し、ロシア領ポーランドにもポーランド人が、同じ民族として存在することをアピールし、ロシア領のポーランド人民のことも忘れないように、と訴えていることになる。

そして、ロシア支配下の窮状の他に、ドモフスキが関心を向けていたのが、ロシア領ポーランド（特に会議王国）におけるポーランド人の政治活動であった。第二部では、ロシア領ポーランドの政治潮流が整理されている。ドモフスキが目じたのは、主として、「服従派 *ugodowcy*」と呼ばれた人々と、ピウスツキらポーランド社会党を主とする「社会主義諸派」という2つの潮流であった。後に、国民民主党に対抗する勢力として、服従派は地主や企業家を代表し、またピウスツキのポーランド社会党を主とする社会主義諸派が、ドモフスキらと対抗しあうことになる。そうした基本構図が、このとき既に認識されていたといえる。

服従派について、ドモフスキは、ペテルブルクを本拠地とする『クライ』紙⁽¹⁴⁾を挙げ、批判していく。特に、ポーランドの分離独立を放棄している点が非難された。また、服従派を構成する社会層から考えると、階級に対する反発も働いていたのであろう⁽¹⁵⁾。他方、社会主義者については、ドモフスキは一定の評価あるいは注目を与えている⁽¹⁶⁾。

第三節 革命的プログラムの提言

『我々のパトリオティズム』第三部では、「我々のプログラム」の内容が概説される。これは、ロシア専制政府に対抗し、攻撃的かつ革命的な手法によって、ポーランド民族が成長するための土台を獲得しようというプログラム（政治綱領）であった。以下、テキストに即し、その内容を解釈していく。

・ゆるやかな死のプログラム

「我々のプログラム」の目的として、まず掲げられているのは、今ある現状に即座に用いることのできる、実効的で現実的なプログラムの提示である。これは、第二部で批判された社会主義プログラムの理想主義性と、対置される性質を明示するものであった。第一部と第二部で述べられたように、ロシア政府による様々な阻害のために、ポーランド民族は、国民へと成長することを妨げられていた。そうした状況で、最も深刻な問題は貧困にあると、ドモフスキは考えていた。

貧困という問題は、ポーランド民族全体、全ての層に関わっているというのが、ドモフスキの認識であった。ここでは、農村プロレタリアートや労働者および手工業者、知識人が、民族の構成要素として分析されている。これら全ての層の人々が、貧困のために、身体的かつ知的に殺されている、とドモフスキは論じた。とくに、食料や書籍の入手困難といった物質面での欠乏が、ポーランド民族の正常な知的成長を妨げている、という連関が強調されている。ここで知的成長のために必要な栄養とされたのは、識字や読書のための時間的余裕、そして出版物へのアクセスであった。出版物に触れ、意識を発達させるためには、まず文字を知らなければならず、また読書に充てる時間がある程に生活に余裕がなければならず、そして何より読むべき出版物が手の届く範囲になくなくてはならない。

文化の発展に最も不可欠の条件は、物質面の繁栄が第一である。食べる分のジャガイモにも事欠くような農民は、概して文盲にならざるを得ない。労働者ならびに手工業者は、餓死しないために家族全員が眠る間もなく働き、自分の人生にとって必要な知識を手に入れることができず、思慮深くなることができず、市民として社会の問題に参与することができない。教育を受けた人であっても、その賃金は最低限の質素な生活にも不足するほど低く、本を買うことができないし、刊行物を予約購読することもできない。こうして、文学が衰退し、社会における知的な活動が退化している。一言でいうなら、現在の貧窮は、上述のように〔ポーランド〕民族を、身体的にも、同時に知的にも殺している。⁽¹⁾

こうしたドモフスキの危機感は、彼が触れる現実に即したものであろう。識字率についていえば、ドモフスキが生まれ育ったのは、圧倒的多数の人々が完全な非識字者であり、かろうじて読み書きできる者や、読み書き以上の教育がある者はごく一部という世界であった⁽²⁾。仮に字が読めたとしても、検閲を経た刊行物は、本当に重要な出来事を伝えることができない、とドモフスキは指摘する。

我々の定期刊行物は、政府が妨害に努めているために、合法的な情報で満足してしまえば最も重要な社会活動の事柄に関してさえ、盲目にならざるを得ない状態になっている。文学は、検閲の残忍な扱いのため、貧血に苦しみ、健康を害してしまった。学校は、道徳的にも知的にも、身体的にも殺人を行っている。これが、ポーランド民族全体がおかれている、発達環境である。⁽³⁾

出版物へのアクセスの欠如は、自らの置かれた状況を把握するための情報の欠如を、同時に意味していた。

物質的ひいては知的な飢餓状態が、ロシア政府によりもたらされている、という前提のもと、そうした現状においても合法的範囲内でポーランド国民が成長し、成熟できる可能性はあるだろうか、とドモフスキは問う。学校や役場は、ポーランド人をロシア化するためのロシアの「道具」であり、ポーランド人の民族性を吸収してしまう。そうした外面からの強制や矯正があるだけでなく、結社が許可されないことや、検閲による出版の自由の侵害が、自発的な内面からの成長をも押しとどめていた。したがって、ロシア政府の法律に触れずに、ポーランド民族が成長する余地はない、とドモフスキは断定する。とくに、合法的範囲内で民族性を伸ばす可能性を否定した主な根拠として、教育環境の悪さと、言語使用におけるロシア語の侵入とが挙げられている。揺籃期の国民を涵養してくれる環境は存在せず、自力で伸びようとすれば法の目のカゴへ閉じ込められてしまう境遇にポーランド民族は置かれ、殺されかけている、というのがドモフスキの現状認識であった。

・「革命的」方法の提言

ポーランド民族が発育するための土台を獲得するには、どうすればよいので

あろうか。合法的な方法は、上述の理由によって除外されている。そこでドモフスキが提唱したのは、非合法かつ「革命的」方法であった。

国民が成長するための土台は、非合法のやり方によって、つまり革命的な方法によって、獲得されねばならない。

我々の政治は、革命的でなくてはならない。なぜなら、有機的政治ではありえないし、拠りどころとできるような、合法的な土台は全く存在しないからだ。我々の政治は、防衛的ではありえない。我々に残された〔権利の〕残骸では、活動し発達するのに十分でなく、また〔政治的〕プログラムは、防衛的なものみに制限されており、ゆるやかな死のプログラムにもなりうる。我々の活動は、政治的成果に到らねばならない。耐えるだけではなく、攻撃的なものでなくてはならない。⁽⁴⁾

ここで問題となるのが、ドモフスキは「革命的 rewolucyjna」という語をどういう意味で用いたのか、という点である。この点について、ドモフスキの旧友として知られ、世紀転換期に政治活動を共にしていたヤブウォノフスキは、「私たち（私とドモフスキ）の世代の、ポーランドの将来及びポーランドが国家として独立を回復する可能性に関する見解は、民族的革命（武装蜂起は意識的な大衆農民だけ）と、社会革命（民族的社会主義または国際社会主義）との間で、躊躇し行き来していた」と回想している⁽⁵⁾。おそらく1890年代には、「革命的」の意味が定まらないまま、武装蜂起に関して「民族的革命」を用いたり、あるいは社会主義諸派がそれぞれの解釈において「社会革命」を用いたりしていたのであろう。

また、ドモフスキの伝記作家であるロマン・ヴァピンスキは、次のような指摘をしている。「少なくとも1905年革命の発生までは、ツァーリ体制との公然の戦いを主張する政治グループのメンバーだけでなく、分割諸帝国に対抗することで連帯するという原則が支持されていた。…マルクスを読んでいたのは、社会主義者やその共感者だけでなく、おそらくはドモフスキも読んでいたと考えられる」⁽⁶⁾。したがって、社会主義的な意味合いでドモフスキが「革命」という語を用いる場合があった可能性も、否定できない。

『我々のパトリオティズム』において、「今日という日に「日々の革命」を実

行せず、その代わりに明日の革命を待つ人々が、どれだけいることだろう。」⁽⁷⁾とドモフスキは述べ、「日々の革命」つまり持続的の革命と、「明日の革命」とを区別している。

「明日の革命」とは、見果てぬ夢としての非現実的な蜂起であろう。ここでは、武装蜂起批判の文脈で「明日の革命」という言葉が用いられているのである。他方、その直前にある「日々の革命」は、すぐにも開始すべき行為とされている。これは、いわば、武力による非継続的な戦いからの脱却と、政治における間断なき戦いの開始とを宣言するものであった。カール・シュミットが引いたように、「政治家は生涯戦い続けるが、兵士のほうは例外的にのみ戦う」ものだという⁽⁸⁾。現実の政治過程における、持続的な戦いを宣言したドモフスキのリアリズムもまた、こうした認識に立ったものでであろう。「日々の革命」について、ドモフスキは、翌1894年にも言及している。

我々は、蜂起にかわって、不断かつ持続的な革命のプログラムを打ち立てよう。この革命は、民族を消耗させるものではなく、むしろ、民族の力を増大させるものである。…社会が目にしてるのは、このような革命の始まりである。⁽⁹⁾

この記述を踏まえ、ヴァピンスキは、ドモフスキの主張を理解した上で、彼の言う「革命」を「民族(主義)的活動」に置き換えても良いのではないかと、という見解を示している⁽¹⁰⁾。つまり、武装蜂起を活動手段として否定しつつ、独立を目指す地下活動を念頭において、「革命」という言葉を用いていた、という解釈である。

結社あるいは政党等の組織をつくり、そこを拠点として政治活動を行うという方法は、ロシア支配下では非合法とされ、公然と行えるものではなかった。ドモフスキのいう革命的な政治の方法は、そうした公然の組織による政治的活動ではなく、非合法の政治活動であった。つまり、革命的という言葉は、政治活動の非合法性を強調し、既存の制度に収まらない活動方針を表明するために、用いられたのであろう。したがって、革命という語が直ちに社会主義的な意味合いで用いられていたわけではないことに注意しなくてはならない。むしろ、「日々の革命」という言葉には、いまや消滅の危機に瀕しているポーランド民族を、ロシアによる抑圧やドイツによる侵食の中で、不断の抵抗を通じて維持

し続けなければならないという危機的認識が込められている。

ただし、第二部で社会主義諸派に強い関心が示されていたことから明らかに、ドモフスキは社会主義をかなり意識していた。既に述べたように、『我々のパトリオティズム』が執筆された1893年4月は、社会主義諸派が次々と現れてくる時期と重なっている。すなわち、ピウスツキのポーランド社会党は1893年に結成され、またローザ・ルクセンブルクのポーランド社会民主党は1893年7月に形成される⁽¹¹⁾。ドモフスキ『我々のパトリオティズム』は、主要な社会主義政党が設立される数ヶ月間に、それらの綱領と平行して書かれたことになる。これら二政党も、やはり非合法活動を厭わないものであった。同じ境遇のもとで政治活動を目指す集団間には、状況からくる不可避的な活動方法の類似があったとしても不思議ではない。また、必ずしも語義が厳密に一致していないにせよ、革命といった同じ用語を使用するなど、相互の主義や信条に与える影響が存在したのであろう。形成期に社会主義諸派が発行していた機関紙の編集メンバーをみると、複数の派の機関紙に所属したり、移動したりする場合があった⁽¹²⁾。状況が劇的に変わる1907年まで、こうした諸集団が本格的に対立することはなかったといってもよい。

そして、革命的方法のほかに、ドモフスキは「攻撃的」方法を強調している。アイルランドの抵抗運動が望ましい例として挙げられているが、これは、ヨーロッパにおける植民地イメージの典型として、アイルランドがポーランドと類推されたのであろう。武装蜂起に訴えるのではなく、ボイコット運動のような長期的かつ持続的な抵抗運動のあり方を、ドモフスキは主張する。これは、伝統的な蜂起主義に対する批判であり、アイルランドの手法を参考とする具体的な代替案の提示でもあった⁽¹³⁾。

ドモフスキが蜂起主義を批判する根拠は、それが有効な手段ではない、という点に集約される。一月蜂起を頂点とする一連の蜂起は、発生する度にロシア側の残忍な鎮圧を招き、ポーランド社会の壊滅をもたらしてきた。あとさきを考えずに蜂起しても、すぐに鎮圧され大きな犠牲を払うだけで、犠牲に見合うだけの成果を生まず、現状を改善し得ない。ただし、有効な活動を行ううえで、犠牲を払うことは当然の前提とされていた。

震える口から囁かれる「犠牲」という言葉を、我々は既に耳にしているが… 犠牲の覚悟なきパトリオティズムなどありえない。我々の

民族を救いたいと欲しながら、その首を差し出そうとしない者は、ゆっくりと自分が腐敗していくのを見るだろう...⁽¹⁴⁾

ドモフスキが表明した攻撃的政治活動の特徴は、政治活動手段としての蜂起の否定（ただし、民族のために犠牲を厭わない精神は尊重している）のほか、ポーランド人社会内部にいる「背信者」への警告であった⁽¹⁵⁾。攻撃的政治活動とは、社会の意識や政治的活力を呼び覚まし、デモや行進、集団抗議行動によって、ロシア政府による報復的な職の剥奪や賃金の不払いを妨害する、というものであった。それによって、ロシア政府の支配制度を崩壊させ、ロシア支配を受け入れるポーランド人の安穩を打破しようとする。つまり、ロシアの支配制度に対する攻撃だけでなく、ロシア支配に寄生するポーランド人への攻撃も含む、内外ふたつの方向へ展開される手法であった。

ここで注意しなくてはならないのは、こうした攻撃的政治活動の当面の目標が、ロシア政府の打倒ではないという点である。これは、伝統的蜂起主義が掲げてきた非現実的な目標に代わるべきものであった。ロシアの圧倒的な軍事力に、武装蜂起で勝つことはできないという現実を認識し、軍事力とは別の力に依拠して、「止むことのない、長期的な革命」⁽¹⁶⁾を戦わなくてはならない。「長期的な革命」の手法について、ドモフスキは以下のように説明する⁽¹⁷⁾。

我々は、合法的な範囲内では発展させることができない民族的活動を、非合法的な形で表明する。我々には、独立した有力な出版刊行物や文芸出版物を持つことが許されていない。だから我々は自由な出版刊行物と、非合法的な文芸とを創出する。民族性の喪失を運命付け、肉体的・精神的な殺人をおこなう〔ロシア政府の〕公立学校に対抗して、我々はポーランド国民の地下学校を設立する。合法的協会・団体が無力なまま、なすすべもなく法に束縛されているのを横目に、我々は秘密の協会を発達させる。我々の社会活動は、非合法的活動に結集せざるを得ない。

法律によって保障された組織的活動ではなく、非合法的かつ非軍事的な活動を展開する以上、「長期的な革命」は、ロシア政府の侵害から自分たちをまもるだけでなく、ポーランド人自身が招いている負の連鎖を断ち、自己の砦を強化す

るものでなくてはならなかった。学校や出版、結社、そして公正な法の支配を象徴する裁判所を独自にもつことで、人々の間にパトリオティックな意識が育てば、背信や裏切りを許さない社会へと成熟できる。それが、ドモフスキの考えであった。それゆえに、攻撃的政治活動は、ポーランド社会の内と外へ向けられたのだといえる。いわば、外面的にロシア政府の制度が作り出した公的なものに対抗して、ポーランド社会の内面に別個の公的な活動空間を創出しようという試みであった。

こうした経緯を踏まえて、三分割領すべてのポーランド国民全体を統一する、というドモフスキの理想をみると、それが世紀転換期に「ポーランド人」の主体となりつつあった「人民 lud」と呼ばれた人々、つまり農民や労働者にとって、日常的に様々な制約を受けたり貧困状態に置かれたりしていた人々にとって(その原因が直接ポーランド分割にあったのかは別として)、よりよい状況へ変化するという理想と魅力を備えていたであろうことがうかがえる。後にポーランドにおいてシオニズムの指導者となるハートグラス (Apolinary Hartglas, 1883-1953) が、十代の頃にドモフスキら全ポーランド主義者の記事を熱心に読んでいたのは、後のドモフスキの反ユダヤ主義からみても興味深い⁽¹⁸⁾。

普遍的(一般的)であることと、言語・民族・宗教(カトリック信仰)によるポーランド人の定義が、大衆化した農民やプロレタリアートを対象に喧伝されたのである。ことに、プロテスタント優勢のプロイセン領や、正教への改宗を迫られるロシア領ポーランドにおいては、カトリックに依拠するまとまりが有力であった。

ドモフスキがポーランド人をどのように定義したのかについては、1902年11月に発表された論考「半ポーランド人」から、幾つかの要素を読み取ることができる。以下の引用部分では、ポーランド人でありながら、ポーランドの統一と独立を目指さず、現状に甘んじる人々への批判が述べられている。これは、いわばポーランド人というものの否定的な像(こうあるべきではない姿)といえるであろう。

ポーランド社会で生活するために必要な程度でのみ、ポーランド語やポーランドの生活習慣を受け入れ——しかしポーランドにおいて生活を享受するために各人が担うべき責任は負わず、民族全体の自己保存や将来的独立と生存、十全な発育環境への志向に参加しない人々に、

〔我々は〕対処しなければならない。…民族的利益に反して同化された人々、あるいは、外的な影響によって道徳的に脱民族化され、民族の志向との結びつきを失った人々、または、ポーランド人であると自認しながら、ポーランドの利益を他の諸民族のそれと矛盾しない限りでのみ承認する人々が…進出している。

こうした、(ポーランド系の) 名前やポーランド語を用いることを根拠に、ポーランド人であると自認する人々は、〔一月〕蜂起後、国民の魂が凋落した時期に大変に増殖し、短期間のうちに世論の中に発生して、急速に若い世代を取り込んでいった。そのため、こうした国民の壮志を成長させる運動に対する執拗な反対表明への熱意が、ここ数年で急速な成果をあげている。⁽¹⁹⁾

こうした批判に続いて、ドモフスキは、ポーランド人としてあるべき姿を対比させる。

…ポーランド国民は、自らの文化と伝統を保持し、独自の魂と、特有かつ不可欠の文明〔文化性〕を備えた、生き生きとした人民の組織的つながりである。それは、ある範囲で共通の必要と利害を持つものであって、個人的な献身につながる厳密な責任を課しており、集団として必要な事柄のために働き、共通の利害のために戦うことを命じている。⁽²⁰⁾

構成員相互の有機的なつながりを重視し、民族という集団への献身を行わないものは、言語・文化的な標識にかかわらず、ポーランド人として、民族の一員としてなすべき義務を果たしていない、とドモフスキは考えていた。それは、共同体の一員として共有されるべきパッションの欠如した状態であった。かつて「ポーランド人」は、シュラフタ身分をもつ人々で構成される「シュラフタの民族」⁽²¹⁾と称された。しかしドモフスキは、そうした共同体としてのつながりを、たんにシュラフタ階級という一つの身分ではなく、農民や労働者といった、国民の基盤となるべき広範な層へと拡大しようとしたのである⁽²²⁾。国民民主党がインテリゲンチア政党から大衆政党へと方向転換したのも、そうした転換が背景にあったとすれば、当然の成り行きであった⁽²³⁾。

註

はしがき

(1) ドモフスキを「建国の父」と呼んだ米国ブランダイス大学の東欧史家アンソニー・ポロンスキー (Antony Polonsky) は、単に戦間期の独立に到るまでのドモフスキの尽力を念頭に置いているのではない。ドモフスキの描いていたポーランド像と、第二次大戦後に成立した「単一民族の国民国家」ポーランドとの、紆余曲折を経ての類似に着目したのである。Polonsky, Antony, “Roman Dmowski and Italian Fascism”, in Bullen, R.J. (ed.) *Ideas into Politics : Aspects of European History, 1880 to 1950* (London, 1984).

(2) Dmowski, Roman, *Nasz Patryotyzm* (Berlin, 1893) (以下、Dmowski, *Nasz.* と表記)。

(3) Dmowski, Roman, *Mysli Nowoczesnego Polaka* (Warszawa, 1934) (以下、Dmowski, *Mysli.* と表記), s. 48.

(4) ドモフスキは、伝統的な蜂起主義を受け継ぐピウスツキら同世代の社会主義者とも対立していた。また両者は、政治的抵抗の手法や、将来のポーランド領土の設定、国際情勢の評価等をめぐって、後年も対立し続けた。ただし、ドモフスキもピウスツキも、ポーランドの政治的独立を大目標としていたという点に注意しておかねばならない。

(5) 岡義武の表現。「国難の外交——幕末外交を担った人々」(座談会、岡義武、木村毅、遠山茂樹、吉野源三郎)『世界』1950年10月号、八三頁。

(6) ドモフスキの生涯について語る際、避けることができないのが反ユダヤ主義の問題である。とくに、1910年代にドモフスキが主導したユダヤ人が経営する商店に対する不買運動や、晩年の「大ポーランド陣営」における活動は、当然ながら激しい批判を浴びている。1893-1908年に焦点をしぼる本稿においては、それらの事例は検討の対象外となる。戦間期以降のポーランドにおいてドモフスキの反ユダヤ的言動がもった意味あいや、その成立の背景については、他稿において詳しく論じることとする。

第一章 ドモフスキ研究の現状

第一節 研究史

(1) 例えば、ドモフスキの政敵であったピウスツキの信奉者として知られる歴史家ヴワディスワフ・ポブクーマリノフスキ (Władysław Pobóg-Malinowski) による研究。詳細は第三節にて後述。

(2) トマシュ・ヴィトウフ (Tomasz Wytuch) から、筆者宛の書簡 (2005年7月15日付)。ヴィトウフは、ワルシャワ大学歴史学科教授。ドモフスキ全集の編集等を手がけた。最近では、ドモフスキから、晩年身を寄せたニクレヴィチー

家に宛てた書簡類に、マリア・ニクレヴィチョーヴァ (Maria Niklewiczowa) が⁶ 1945年に執筆した回想録を付した書簡集を編集している。Wytuch, Tomasz, Przedmowa w Niklewiczowa, Marja, *Pan Roman Wspomnienia o Roman Dmowskim* (Warszawa, 2001), opracowanie naukowe, Wituch, Tomasz.

⁽³⁾ ロンドンのドモフスキ・センターに保管されていた、ドモフスキの個人的書簡や蔵書等は、現在、ポーランド家族連盟 Liga Polskich Rodzin という極右政党連盟の管理下で保存されており、同党関係者以外には開示されにくい状態になっている。なお、2005年9月に実施された議会選挙において、このポーランド家族連盟から、イェンゼイ・ドモフスキ (Jędrzej Dmowski) が立候補し落選した。イェンゼイ・ドモフスキは、ロマン・ドモフスキの遠縁に当り、ドモフスキの知名度や思想を、選挙戦において援用しようとしたと言われている。

⁽⁴⁾ 後述のマリウシュ・クワコフスキ (Mariusz Kułakowski) による研究、および本稿第二節参照。

⁽⁵⁾ ドモフスキの研究史については、すでに拙稿「ロマン・ドモフスキ著「我々のパトリオティズム」1893年」訳者解題『北大法学論集』第56巻第1号 (2005年5月) 四九一―五七頁において言及したが、本稿においては、2005年以降の新たな研究を加えた。

⁽⁶⁾ Pobóg-Malinowski, Władysław, *Narodowa Demokracja, 1887-1918 : Fakty i Dokumenty* (Warszawa, 1933).

⁽⁷⁾ 例えば、ドモフスキと友人関係にあり、1895年から1899年まで『グウォス』紙の編集者であったジグムント・ヴァシレフスキ (Zygmunt Wasilewski, 1865-1948) は、未公開の回想録を残している。この回想録は、1865年から1939年までの、全三部で構成されている。ドモフスキの死後まもない1940年に出版を予定していたとみられるが、結局未刊行のまま、タイプ原稿の状態で残された。このうち第二部 (1890-1914年) には、とくに、国民民主党形成期の状況について詳しく記されており、史料的价值が高いとされている。ポーランド科学アカデミー附属ワルシャワ文書館 Archiwum Polskiej Akademii Nauk w Warszawie 所蔵。なお、同文書館には、史料集 Papiery Kozickiego w Archiwum Polskiej Akademii Nauk w Warszawie も所蔵されている。筆者スタニスワフ・コジツキ (Stanisław Kozicki, 1876-1958) は、国民民主党の主要メンバーとして知られ、ドモフスキの秘書を務めた人物であった。この史料集には、国民民主党の内情や、そこにおいてドモフスキが果たした役割などを知る上で重要な文書が多く含まれている。コジツキは、更に、回想録も残している。Kozicki, Stanisław, *Pół Życia Politycznego. Pamiętnik, T. III*, Biblioteka PAN w Krakowie, Rkps, Syg. 7849および Kozicki, Stanisław, *Pamiętniki Stanisława Kozickiego (1876-1939)*, T. 1-3, BJ, Sygn. 9783 III 参照。そのほかに、公開されたものとして、1870年代からドモフスキの友人であったヴワディスワフ・ヤブウォノフスキ

(Władysław Jabłonowski, 1865-1956) の回想録が出版されている。Jabłonowski, Władysław, *Z Biegami Lat Wspomnienia o Romaniu Dmowskim* (Częstchowa, 1939)。ヤブウォノフスキは、パリとライプツィヒで哲学と文学を学んだ後、評論家・政治家として活動し、1893年『グウォス』紙においてドモフスキらと協働した。後年国民民主党に属し、1908-1912年にかけてロシアの第三ドゥーマに出席した。

⁽⁸⁾ Kułakowski, Mariusz, *Roman Dmowski w Świetle Listów i Wspomnień*, t. 1-2 (Londyn, 1968)。クワコフスキ以降の研究はすべて、彼の史料に基づいてドモフスキ像を構成していると言っても過言ではない。

⁽⁹⁾ Piszczkowski, Tadeusz, *Anglia a Polska 1914-1939 w Świetle Dokumentów Brytyjskich* (London, 1975)。

⁽¹⁰⁾ ドモフスキの著書が1986年にポーランド・カトリック教会の司教の署名入りで再版されたことについて、カトリック教会とナショナリズムの関係を指摘したものに、Ost, David, “Introduction”, in, Michnik, Adam, *The Church and the Left* (Chicago & London, 1993), pp. 19-20。アダム・ミフニク (Adam Michnik) はワルシャワ生まれの政治評論家。ポーランド民主化運動の際、デイヴィット・オスト (David Ost) から反体制知識人グループK O Rの指導者として活躍した。

⁽¹¹⁾ Wapiński, Roman, *Roman Dmowski* (Lublin, 1988)。

⁽¹²⁾ Wolsza, Tadeusz, *Narodowa Demokracja wobec Chłopów w Latach 1887-1914 Programy, Polityka, Działalność* (Warszawa, 1992) は、検閲を避けるため、脱稿後も7年間出版されなかった。ヴォルシャは、歴史・文学研究を目的とするポーランド科学アカデミー Polska Akademia Nauki の歴史家。

⁽¹³⁾ 国民民主党に関する、政治活動家集団全体を視野に入れた研究としては、Molenda, Jan, *Piłsudczycy a Narodowi Demokraci 1908-1918* (Warszawa, 1980) や、Mroczo, Marian, *Ziemie Dzielnicy Pruskiej w Polskich Koncepcjach i Działalności Politycznej 1864-1939* (Gdańsk, 1994) がある。国民民主党に関する研究は、ドモフスキに主眼を置く研究とは、やや質が異なっている。第一次大戦後、ドモフスキは現実政治において有効な政治活動ができなかったものの、国民民主党は、戦間期ポーランドの主要政党として成長していく。したがって、戦間期以降のドモフスキと国民民主党の活動は、切り離して検討するのが適当であろう。ただし、ドモフスキの政治活動初期にあたる民族連盟 (のちの国民民主党) の政治思想形成期に、ポプワフスキら主要活動家から受けた影響が大きかったことは確かである。ヴォルシャらの手法は、ドモフスキ初期に焦点をあてた研究を行う際、とくに有効なものといえる。

第二節 ポーランド国外の研究状況

⁽¹⁾ Davies, Norman, “The Poles in Great Britain 1914-1919” in *The Slavonic and*

East European Review, Vol. L, No. 118, January 1972, Cambridge, pp. 63-89. ノーマン・デイヴィスは、イギリス・ボルトン生まれのポーランド史家。ロンドン大学スラヴ研究所歴史学教授を経て現在ロンドン大学名誉教授。2005年には、前年に上梓された Davies, Norman, *Powstanie '44* (Kraków, 2004) が、ワルシャワ蜂起の優れた歴史研究としてポーランド国内において高く評価され、ワルシャワ名誉市民の称号を授与された。

(2) Davies, Norman, *Heart of Europe, the Past in Poland's Present* (Oxford, New York, 1984), pp. 113-129.

(3) Fountain, Alvin Marcus, *Roman Dmowski : Party, Tactics, Ideology 1895-1907* (New York, 1980). ファウンテンは、1976年にコロンビア大学博士課程（歴史）を修了。

(4) Witkowski, Peter Alfred, *Roman Dmowski and the Thirteenth Point* (Ph. D. diss. Indiana University : 1981).

(5) Latawski, Paul, *Great Britain and the Rebirth of Poland 1914-1918 : Official and Unofficial Influences on British Policy* (Ph. D. diss. Indiana University : 1985). ラタフスキは、その後1992年に、ロンドンにおけるドモフスキの活動をまとめた論文を発表している。Latawski, Paul, Roman Dmowski, the Polish Question, and Western Opinion, 1915-1918 : The Case of Britain, in *The Reconstruction of Poland, 1914-1923*, ed. Latawski, Paul, *School of Slavonic and East European Studies* 1992, London, pp. 1-11.

(6) Blobaum, Robert, E. *Rewolucja Russian Poland, 1904-1907* (Itaca and London, 1995). ロバート・ブローバウムは、ウェストヴァージニア大学の歴史家。

(7) Porter, Brian, *When Nationalism Began to Hale : Imagining Modern Politics in Nineteenth-century Poland* (New York, 2000).

(8) 宮島直機『近代ポーランド近代政治史研究』（中央大学出版部、1978年）は、ポーランドおよび英米圏の研究史に比しても、高い水準にある研究である。

第三節 現代ポーランドの研究動向

(1) Bułhak, Władysław, *Dmowski-Rosja a kwestia Polska : u źródeł orientacji rosyjskiej obozu narodowego 1886-1908* (Warszawa, 2000) (以下、Bułhak, *Dmowski-Rosja* と表記)。ブーハクは、ポーランド東部国境地域の出身。東方研究センター及びMSZ 戦略研究科の専門研究員を経て、PAP モスクワ特派員。1998年ワルシャワ大学人文学科歴史学博士。2000年からIPN 国家記録院の公教育事務局副代表。ポーランド史家。拙稿『北大法学論集』第56巻第1号（2005年5月）四九一五七頁において、ブーハクの主張についてすでに触れたが、本稿において更に詳しく説明したい。なお、このブーハク論文においては、ユダヤ人問題が扱われていない。ユダヤ人問題については、Bułhak, Władysław, ‘The Road to

Głęboczyca Polish Historical Culture at the Crossroads', in Klas-Goran Karlsson and Ulf Zander (ed.), *Holocaust Heritage* (Malmo, 2004)において特に論じられている。

(2) Łagoda, Maciej, *Dmowski, naród i państwo. Doktryna polityczna "Przeglądu Wszepolskiego" (1895-1905)* (Poznań, 2002).

また、クシィヴィエツは、ポーランド科学アカデミー PAN の歴史家。博士論文 Krzywiec, Grzegosz, *Roman Dmowski i Środowisko Radykalnej Inteligencji Przełomu wieków* (1886-1905) (Ph.D. diss. PAN: 2005) は2006年6月時点で出版準備のため校正中。クシィヴィエツ氏の御厚意により同草稿を閲読できた。同氏に感謝する。

第二章 全ポーランド主義の形成

第一節 なぜ全ポーランド主義なのか

(1) Dmowski, *Nasz*, s. 3. 『我々のパトリオティズム』が発表される前年の1892年、ツアーリ暗殺事件への関与を疑われ5年間シベリアへ流刑されていたピウスツキが、ワルシャワへ戻ってきた。そして、1893年、ポーランド社会党を結成する。いわば1893年は、ロシア領ポーランドにおける独立のための政治活動の幕開けであった。

(2) 五月三日憲法 *Konstytucja Trzeciego Maja* は、1791年に制定され、その中で農民身分というものゝ初めて定められた。憲法本文は、例えば、Borucki, Marek, *Konstytucje Polskie 1791-1997* (Warszawa, 2002), s. 19-20の *Ustawa rządowa z dnia 3 maja 1791 roku, IV. Chłopi włościanie* 参照。『我々のパトリオティズム』における、農民問題に関するドモフスキの議論も、この憲法の身分規定を前提にしているのであろう。

(3) Dmowski, *Nasz*.

(4) 伊藤忠良『ドイツの長い十九世紀』(青木書店、2002年)六一七頁。

(5) Davies, Norman, *God's Playground, Vol.II* (Oxford, 2005) (以下、Davies, *God's* と表記), p. 85.

(6) ガリツィアは、現在のポーランド南東部・東部からウクライナ西部にかけての地域。東ガリツィアには、ガリツィア全体のウクライナ人人口の圧倒的多数が集中していた。後に、東ガリツィアのウクライナ人住民は、1918-1919年にかけて、西ウクライナ人民共和国として、ウクライナ人による統治を行おうとし、独立後間もないポーランド政府と衝突する。

(7) 野村真理「恩讐の彼方——東ガリツィアのポーランド人・ユダヤ人・ウクライナ人」『民族』(ミネルヴァ書房、2003年)一二一六六頁。

(8) いわゆる国境地帯 *Kresy* と呼ばれる地域。現在ではリトアニアやベラルーシ西部、ウクライナ西部にあたる。

⁽⁹⁾ 小山論文は、16世紀以降、ウクライナなど東方領域に対してポーランドのシユラフタが抱いていたイメージを、西欧諸国の航海者が新大陸やインドに抱いていたイメージになぞらえて分析している。小山哲「われらもまたインドに至らん—近世ポーランドにおける「新世界」認識とウクライナ植民論」『人文科学報』85号、2001年6月、一一二五頁。

⁽¹⁰⁾ Hoerder, Dirk, *Culture in Contact* (Durham, 2002), p. 326. ドモフスキは、『我々のパトリオティズム』においてこうしたロシア政府のユダヤ人移住政策を批判している。それは当然ながら、ユダヤ人に対する権利侵害を批判するのではなく、旧ポーランド領に異民族であるユダヤ人を故意に移住させ、ポーランド人にとって不利な状況をもたらしている、という視点からなされたものであった。ドモフスキはこの際、ユダヤ人を「ヤギたち」（ユダヤ人の蔑称）と呼び、その入植に対する危機感と嫌悪感を示している。

第二節 『我々のパトリオティズム』

⁽¹⁾ Dmowski, *Nasz.* s. 3.

⁽²⁾ Dmowski, *Nasz.* s. 3-4.

⁽³⁾ Łagoda, *op. cit.* s. 187.

⁽⁴⁾ ワゴダ論文に対して、ブーハクは *Kwalternik Historyczny* (2005) に辛辣な書評を寄せている。とくに、ワゴダによる先行研究評価が不適切であること、1996年以降の研究について触れられていないこと、一次史料の文面を表面的な意味通りに解釈し政治的文脈を酌んでいないこと、などが批判されている。ただし、巻末に付録として記載された『全ポーランド評論』執筆者名簿(筆名解説を含む)には史料の価値があると評価している。ブーハク博士の御厚意により同草稿を出版前に閲読できた。同博士に感謝する。

⁽⁵⁾ Dmowski, *Nasz.* s. 4.

⁽⁶⁾ Bułhak, *op. cit.* Popławski, Jan, Ludwik, 'Nasze Siły', "*Przegląd Wszechpolski*" (1902), s. 344. Kozicki, Stanisław, *Historia Ligi Narodowej*, t. 2, k. 4 (BJ, rkps. 25/62).

⁽⁷⁾ 1897年の会議王国における宗教別人口構成を見ると、都市部ではカトリック47.5%、ユダヤ教37.4%、その他15.1%であり、他方都市部以外の地域では、カトリック82.8%、ユダヤ教7.2%、その他10%となっている。これらの数値はあくまで目安としかならないが、会議王国においては、農村部にカトリック信者が多く、ポーランド人人口が相対的に多数であったことが類推される。GUS, *Historia Polski w Liczbach* (Warszawa, 2003), s. 188.

⁽⁸⁾ この組織改変計画について、若きバリツキとドモフスキの協力関係を描いた回想が残されている。Kułakowski, *op. cit.* t. 1, s. 145-146.

⁽⁹⁾ Fountain, *op. cit.* p. 21.

(10) Dmowski, *Nasz.* s. 3より引用。強調は本文のまま。拙訳「ロマン・ドモフスキ著『我々のパトリオティズム』1893年』『北大法学論集』第56巻第1号(2005年5月)五七-八七頁においては、naródを「国民」、obywatelを「市民」と訳出した。これは、ドモフスキが、いまだ存在しないポーランド国家を構成するものとして naród を想定していることから、「国民」と解するのが適当と考えたためであった。また、obywatel についてドモフスキは、政治意識を持たない農民を啓蒙し、権利義務を持つ活動主体たる市民へと成長させる、という展望を持っていた。そのため、権利義務を持つ主体という意味で、「市民」の訳語をあてた。

しかし、その後、naródを「民族」、obywatelを「国民」と訳するのが適切であるという御教示を、宮島直機中央大学教授より受けた。確かに、ドモフスキの議論においても、一国家の中で複数の naród が競合する、という記述がみられ、この場合には、naród を「国民」ではなく「民族」と訳出するのが適切であった。また、obywatel については、同源の obywatelstwo が、一般に「国籍」と訳されていることから、obywatel を「国民」と訳すほうが、より適切であった。

そこで、本稿においては、naród を「民族」、obywatel を「国民」と訳出していく。ただし、これらの用語は、必ずしも一義的なものではない。polityka narodowa については、国民形成を目指す政治という解釈から、「民族的政治」ではなく「国民への政治」と意識している。文脈によって訳語に幅が生じることをお許し願いたい。

(11) Davies, *God's.* p. 10.

(12) ドモフスキの「全ポーランド」観は、ポプワフスキのそれを受け継ぎ発展させたものであった。『我々のパトリオティズム』が書かれる二年前の1891年以降、ドモフスキは『グウォス』紙に寄稿していた。この新聞は、書き手の政治的立場に寄らず記事を掲載していたが、主たる論調はポーランド・ナショナリズムであった。そして、読み手を貴族ではなく農民に置き換えた点に特徴があった。ドモフスキが初めて『グウォス』紙編集者の会合に参加したのは1890年のことである。そのとき、「快活で人当たりがよかった」ドモフスキは、すぐにメンバーに打ち解けた、とドモフスキを会合に誘ったヴワディスワフ・ヤブウォノフスキは回想している。Fountain, *op. cit.* p. 17.

この編集グループの中で、ドモフスキが出会ったのが、当時のポーランド・ナショナリズムの牽引者の存在であるヤン・ルドヴィク・ポプワフスキであった。ポプワフスキが唱えた思想のうち、とくにドモフスキが共感したもののひとつが、「全ポーランド wszechpolski」観である。これは、三分割領の統合を訴え、「三面忠誠主義」や「有機的労働」に対抗する姿勢であり、ポプワフスキの特徴といえる。

ドモフスキが1893年に『我々のパトリオティズム』で述べた「ポーランド全体 ogólnopolski」という思想は、このポプワフスキの主張と、非常に近い内容

である。1895年に、ドモフスキはオーストリア領ルヴフに移り、そこで『全ポーランド評論』紙の編集に着手する。この『全ポーランド評論』という名称には、ドモフスキの思想にポプワフスキの言葉が与えた影響を看取することができる。

そしてポプワフスキが『全ポーランド評論』紙の編集に参加し始めた1896年から、戦間期のポーランド独立に至るまで、「全ポーランド」思想はドモフスキ率いる国民民主党のスローガンであり続けた。この『我々のパトリオティズム』には、名づけられる以前の「全ポーランド」思想が既に存在していたといえよう。

⁽¹³⁾ Dmowski, *Nasz.* s. 3.

⁽¹⁴⁾ 「服従派」の代表的派閥がペテルブルクで発刊していた機関紙。

⁽¹⁵⁾ 「服従派」は、「忠誠派 *loyjaliści*」とも称されている。例えば Dmowski, *Nasz.* s. 15 参照。ただし、「三面忠誠主義」や「有機的労働」を唱導し、「服従派」と称された人々も、たんにロシア政府に追随し、従順に同化されていたわけではなかった。文化的また経済的にポーランド人の地位を高めていこう、というのが「服従派」の主張であった。例えば、ドモフスキが批判する『クライ』紙は、ロシア統治下でありながらポーランド語で発行されていた。また、「服従派」の代表的人物である文学者ヘンリク・シェンキエヴィチ (Henryk Sienkiewicz, 1846-1916) は、シュラフタの記憶を喚起する民族的な小説を発表していたことで知られ、ロシア閣僚に対する公開状を出すなど、積極的にポーランド人の地位向上に努めていた。Sienkiewicz, Henryk, *Listy Otwarte Polaka do Ministra Rosyjskiego* (Lwów, 1904)。従って、自己の個人的利益だけを護るために服従しているのだ、という「服従派」に対するドモフスキの批判は、彼自身の現実路線の主張を「服従派」のそれと差異化するため、激しくならざるを得なかったのであろう。例えば、Dmowski, *Nasz.* s. 15 や、Dmowski, “Pół-Polacy”, in , Dmowski, *Dziesięć Lat Walki* (Częstchowa, 1938) には、そういった傾向が見られる。しかし、両者の立場には共通する部分もあったと考えられる。

ただし、「服従派」を構成していたのは、主に、シェンキエヴィチや、ボレスワフ・プルス (Bolesław Prus, 1847-1912) のような大知識人や、大地主といった有産階級であった。これに対しドモフスキは、「シュラフタの民族」から農民・労働者のそれへと、「ポーランド人」の基盤を転換しようとしていた。したがって、両者の対立を、いわば民族の主たる構成要素をめぐる対立とみることもできるであろう。Fountain, *op. cit.* p. 92, note 23. また、ポーランドのブルジョワジーは、ツァーリズムが資本主義の発達を推進し、広範な市場を提供するからこそ、ロシア帝国を必要とし、忠誠を誓っていたのだという解釈を示したものに、パウル・フレーリヒ、伊藤成彦訳『ローザ・ルクセンブルク その思想と生涯』(御茶の水書房、1987年) 三四頁。

(16) 『我々のパトリオティズム』が発表された1893年には、ポーランド社会党やポーランド社会民主党といった社会主義者のグループが、次々と政治綱領を発表した。既に述べたように、民族的利害よりも階級的利害を重視するポーランド社会民主党は別として、ポーランド社会党は、ロシアからの「ポーランド独立」を共通の政治活動目的としていた。従って、この時点では、ドモフスキらの立場と社会主義者の立場に、共通点もみられた。

こうした状況が劇的に変化するのは、1905年である。日露戦争でロシアが敗北し、内政の危機的状況からロシア革命が発生すると、その激震は、ロシア領ポーランドの政治・経済状況にも及んだ。

ポーランド社会党は、ポーランドの独立やロシア革命への対応を争点として、議論と対立を繰り返し、内部に軋轢を生じていた。ローザ・ルクセンブルク (Róża Luxemburg, 1870-1919) は、ポーランド独立という民族の利益を、より高次にある階級の利益に包括することを主張し、ロシア絶対主義の打倒そのものを目標としていた。そのため、1893年に、当時戦略的または民族主義的立場からポーランド独立を支持していたポーランド社会党から分離し、ポーランド王国社会民主党を結成する。その後、ポーランド社会党は、ロシア革命が昂揚するなか更に党内で対立を深め、1906年党大会において、ピウスツキらポーランドの独立をスローガンとする「社会愛国主義者」と呼ばれる少数派と、ロシア革命を支持するポーランド社会党左派とに分裂する。パウエル・フレリヒ、前出、四五頁、三七頁、一三三-五頁。

他方ドモフスキは、ロシア革命に直面すると、窮地にあるロシア政府に譲歩させて自治を得るべきであると主張し、革命を支持する「ポーランド社会党左派」とも、ツァーリ政府打倒を唱えるピウスツキら「社会愛国主義者」とも、対立した。ドモフスキら「全ポーランド主義」者は、衰弱したロシア政府から譲歩を引き出すのが容易になったと判断、かつドイツのもたらす危険を考慮し、武装蜂起によるツァーリ政権打倒ではなく、政治的交渉による自治獲得を目下の課題としたのである。

第三節 革命的プログラムの提言

(1) Dmowski, *Nasz.* s. 22.

(2) 1862年当時のロシア領ポーランドにおける識字率については、宮島直機『近代ポーランド近代政治史研究』（中央大学出版部、1978年）二六三頁、註一六を参照。

(3) Dmowski, *Nasz.* s. 23.

(4) Dmowski, *Nasz.* s. 23. 強調は原典のまま。なお、引用中の「有機的政治」は、「有機的労働」を指す。

(5) Wapiński, *op. cit.* s. 48, note 52より再引用。Jabłonowski, Władysław, *Rola*

Romana Dmowskiego w Rozwoju Świadomości Narodowej, w Dmowski, Roman, *Przyczynki — Przemowienia* (Poznan 1936), s. 63.

(6) Wapiński, *op. cit.* s. 49.

(7) Dmowski, *Nasz.* s. 19.

(8) C. シュミット、田中浩／原田武雄訳『政治的なものの概念』（未來社、1970年）、二七頁。

(9) Wapiński, *op. cit.* s. 67 より再引用。Dmowski, Roman, *Po Manifestacji 17 Kwietnia* (Lwów, 1894), s. 19.

(10) Wapiński, *op. cit.* s. 67.

(11) 1893年にヴィルノでポーランド社会党が結成された経緯については、宮島直機『ポーランド近代政治史研究』（中央大学出版局、1978年）、二七-二九頁を参照。Fountain, *op. cit.* p. 88. 『全ポーランド評論』『全ポーランド評論』

(12) 例えば、後に民族連盟の思想上の指導者となるポプワフスキも、1880年代には社会主義系新聞で執筆していたと、宮島直機、前出、二六五頁は指摘している。また、1900年代に入ってから、イギリス国籍をもつポーランド人ジャーナリスト、ジェームス・ダグラス（James Douglas）が、ポーランド社会党系新聞の記者を務めつつ、ドモフスキとも行動を共にするなど、両方を掛け持ちしていた。競合関係はあったものの、諸派の構成は、メンバーが重複し混在する多元的なものであったと考えられる。

(13) 後にドモフスキは、政治活動の手段として、ボイコットを実際に展開する。ただし、その際に対象となったのは、ロシア政府ではなくユダヤ人商人であった。それがドモフスキの反ユダヤ主義の証拠として、死後も論争を呼ぶこととなる。しかしドモフスキ本人は、ボイコットは直接的殺人と異なり、生物種としての「民族」間の競争を行ううえで公正な方法なのだ、と主張した。Dmowski, Roman, “Poland, Old and New” in Duff, J. D. (ed.) *Russian Realities & Problems* (Cambridge, 1917), pp. 115-116. また、“The National Democrats and the Jewish Boycott”, in *Memorandum on the Present Condition of Political Parties in the Kingdom of Poland* (The National Archives London : Cabinet Foreign Office, PRO FO FO 371/3279-169676), p. 29参照。

(14) Dmowski, *Nasz.* s. 23.

(15) 同様の警告は、後に Dmowski, Roman, “Pół-Polacy”, in Dmowski, Roman, *Dziesięć Lat Walki* (Częstchowa, 1938) において繰り返される。「半ポーランド人」は、当初、1902年11月に『全ポーランド評論』に掲載された。ドモフスキは、この表現によって明示的にユダヤ人を攻撃対象にしているわけではないが、「半ポーランド人」とされる人々の中にユダヤ人も含まれるという。「半ポーランド人」と同時期に執筆された「奇妙な連立」という別の記事では、敵対者として、ユダヤ人と共に「服従派」や社会主義者、ポジティブリストが挙げら

れている。Dmowski, Roman, “Dziwna Koalicja”, in Dmowski, *op. cit.* s. 110. なお Porter, *op. cit.*, p. 281, note 164が上記と同じ解釈を示している。

(16) Dmowski, *Nasz.* s. 24.

(17) Dmowski, *Nasz.* s. 24-25より引用、下線加筆。なお、ドモフスキが用いた「道徳の力」という概念は、イギリスのチャーティスト運動に発想を得たものと考えられる。ドモフスキがイギリス滞在から受けた影響について、Fountain, *op. cit.* pp. 47-64.

(18) Bułhak, *Dmowski-Rosja.* s. 73.

(19) Dmowski, “Poł-Polacy”, in Dmowski, *Dziesięć Lat Walki* (Częstchowa, 1938), s. 105.

(20) *Ibid.*

(21) 例えば Fountain, *op. cit.* p. 92, note 32.

(22) ただし、シュラフタの価値観を、新たに民族の構成員となった農民が、その行動規範としてうけいれることになった、と宮島直機は指摘している。宮島、前出、二六頁。

(23) 民族の基盤を反映してのプログラム転換には、武装蜂起を放棄することの意味が示唆されていた。1903年にドモフスキが執筆したプログラムによる武装蜂起との決別は、民族連盟 Liga Narodowa が活動の重心をシュラフタあるいはインテリゲンチァから農民大衆 lud に移したということを象徴する転換であった。これは、ロシア国家体制とは切り離された別個の公的活動領域を創出しようとする点と、武器を持たないという点の、二つの変更を意味していた。

ナショナリズムを暴力から切り離したという意味での転換は、プログラムが武装蜂起を断念したことに表れ明示されている。ポーランドの場合、武装蜂起を主導していたのは主としてシュラフタであり、知識人であった。この傾向は、結果として知識人層の壊滅を招いたワルシャワ蜂起まで連続していた。シュラフタの呼びかけに農民は応じず、蜂起が失敗したという例も多かった。したがって、民族連盟が大衆政党に転じたのがこの時期だったとすれば、農民大衆の意思を反映し、蜂起が主要な手段でなくなったのは、むしろ自然なことだったといえる。このプログラム転換は、いわばボタンの掛違いをただす政治的転換であった。シュラフタが理想としていた、武装蜂起という政治活動のあり方と、大衆政治という現状において展開されるべき活動との齟齬をただす転換であった。すなわち民族連盟のプログラム転換は、「シュラフタの民族」から大衆を基盤とする国民の変化を反映し、従来の蜂起主義の信条を修正したのである。